

いのちへのまなざし

ながれ

川村 晃生 (かわむら てるお/慶應義塾大学名誉教授(環境人文学))

問題の所在

或る講演会でのことであった。私はリニア新幹線を材料に、果てしない科学技術の進歩とそれへの盲信に警鐘を鳴らし、過度な技術の進展は環境を破壊し人間自身を危機に追い込むといったことを骨子とした話題を提供していた。講演が終って意見交換に入った時、大学を退職した科学技術系の研究者とおぼしき人が、私に次のような意見を述べた。

「それは無理ですよ。人間には欲があるのですから。」

私は愕然とした。一言で言えば、これは小学生レベルの発言である。なんともお粗末な一言が大学に在職した研究者の口から飛び出したのである。その大学の学生たちは、このような価値観のもとで教育を受けてきたことになる。技術の進歩を絶対善だというに等しく、それがいまの日本の科学技術立国観を支えている。

確かに人間には欲がある。しかし大学のような知の集合体は、その欲をいかに抑制し克服するかを議論し、そのすべを模索するのが本来の場であり役割であるはずである。欲望のままに技術の進歩ばかりを追求し、利便性だけを求めていたら、人間の破滅は必然ではないのか。福島原発事故はその象徴である。

私は技術の進歩をむやみに否定しようというのではない。しかし技術の進歩を是認するのであれば、どうしても必要な絶対条件がある。それは技術の進歩と平行に人間の倫理が深められねばならないということだ。巨大技術になればなるほど、それを扱う人間の倫理は深められねばならないのである。だが昨今の風潮を見ていると、ITにせよAIにせよ、すでに人間はそれとは逆方向に向って歯

止めのないままに歩き始めているようにしか思えない。いったいなぜこんな末期的状況を迎えてしまったのだろうか。

問題の原因

その原因を私なりに突き詰めると、二つの問題に絞られてくる。一つは人間の自然との乖離による自然観の喪失と、もう一つはゆき過ぎた経済への欲望である。しかもこの二つは根底のところでは分ち難く結ばれている。そのことを説明しよう。

近代という時代は、農林漁業から工業や商業中心の社会への移行を意味している。そのことによって何が起こったのかと言えば、労働人口の都市への極端な集中であった。資本主義経済はこの圧倒的な都市化によって発達してきた。そして都市は肥大化すればするほど、人工的な空間と化し、自然は失われていく。そのような自然喪失空間の中で生きている人々に、自然を理解しろと言っても無理である。

ではここで言う自然とは何か。それは美しさや癒やしの意味の自然ではない。そこでの自然とは、私たちの衣食住を支えてくれる自然である。いや言葉を変えて言い直した方がいい。それはつまり〈いのちの自然〉ということだ。

いまでは誰もが知るところとなった金子みすゞの「大漁」という詩がある。

朝焼小焼だ
大漁だ
大羽鱸いわしの
大漁だ
浜は祭りの
ようだけど

海のなかでは
何万の
鱈のとむらい
するだろう

人工的な空間に身を置くと、私たちが口にするいのちの出所が分からなくなる。魚も肉も野菜もすべてスーパーで調達される。そこには収穫や捕獲の現場はなく、すべて金銭の現場と化す。となれば自然（いのち）よりも金銭に比重が置かれ、経済優先になるのは必然の成行である。私がさきに自然観の喪失と言ったのは、このことを指している。そして倫理の問題も、これに深く関わっている。制御がきかない自然の猛威の中で、私たちのいのちを育む膨大な量のいのちたちを手に入れようとする人たちは、自然を畏敬し、自然に感謝し、自然を愛してきた。そういう心の使い方が、私の言う一つの倫理なのである。したがって科学技術もそれを基（もと）としなければならないはずなのだが、その倫理を蔑ろにしたためにさまざまな環境問題が惹き起こされてしまったのではないか。

問題の処方

ではどうしたらよいのだろうか。一つは机に向ってでもできることがある。それはいのちの知に耳を傾けることだ。たとえば石牟礼道子を読むという手がある。『苦海浄土』に代表される彼女の作品は、いのちの主題で満ち満ちているが、彼女と昵懇^{じっこん}であった渡辺京二氏は次のようなエピソードを書き留めている。

高速道路で車が猫や狸にぶつかって死ぬと誰もが気に止めるが、自分の車が海から這い上ってきた小動物を轢いて真っ平にして走っても誰も意識しない。ところが彼女はそれを見て書いた。石牟礼道子一人が書いた。これはやは

り生命に対する並々ならぬ共感能力です。

そしてその原稿を依頼した澤地久枝氏は、それを読んで皆で泣いたという。これは活字の中のいのちの発見と言っている。

一方それを体感するにはどうすればよいのだろうか。その手っ取り早い方法としては、たとえば自ら土を耕し農業に触れるという手がある。私自身省みても、いのちの発見の出発点は故郷に戻って始めた畑仕事だった。農事に携われば土の生産力の大きさに気付かされる。土は陽光、雨水、気温、微生物のさまざまな循環によって、自ずと無限のいのちを育む力を持っている。これは環境問題の原点と言えるものだが、まずは個人のライフスタイルの中にこれを取り込むことはそう難しいことではない。問題はこれをはたして社会の制度の中に組み込めるかということだ。

モンゴル研究者の小貫雅男氏は、つとにCFP 複合社会を提唱し、菜園家族構想の実現に努めている。CFP 複合社会とは、資本主義社会 (Capitalism)、家族小経営 (Family)、公共性 (Public) の各セクターを複合化させた社会で、一週間のうち二日間だけ従来型の仕事（民間企業、公的機関）に携わり、残りの五日間は菜園や手工業、商業などを家族的経営において行うというものである。

当然そこでは高い経済水準を求めることはできない。しかし経済水準の高低が幸福とは無関係であることは、世界の幸福度ランキング調査の結果が示している。むしろ菜園で家族が自らの食料を調達し、教育や文化活動にも携わることができるという利点をこそ評価すべきであろう。何より「家族全員で仕事ができた昭和 30 年代前半が最も充実していた」と追懐する農民たちの証言は、私たちに一つの幸福を予感させるものである。そしてそこには環境問題への懸念はひとかけらもない。